昭和38年11月9日の三川鉱爆発により、坑内から噴き出してきた爆風のためめちゃくちゃに破壊された坑口附近の建物。この惨状断じて忘れるまい。

三池闘争

発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話 ③3033 ③3034 番
編集兼発行人　澤田紀生
年間600円　送料共

第四次合理化許さず

―決して忘れるな、三井の爆発責任―

怒り貫き、団結し闘おう

中央委員会決定 闘争方針

このほど開かれた中央委員会は、かねて坑場で討議中だった執行部提案の「第四次合理化・CO遺族闘争方針」を、さらに討論を積み重ねた結果、「CO患者守る会運動方針」とともに、満場一致をもって決定した。

この日の中央委員会は、同提案をめぐるあらゆる問題を掘り起こし討議したが、宮浦鉱閉鎖を軸とした会社のこんどの合理化提案は、単に労仂強化や賃下げ、その他の労仂条件の改悪といったものにとどまるばかりでなく、またまた重大災害をひき起こしかねない性質の攻撃である点を見定め、これからはCO患者・遺族にかかわる要求を貫くばかりでなく、いっそうの怒りをこめてあくまで三井の爆発責任を追及しながら、第四次合理化阻止闘争に立ちあがる決意を固めた。

(方針書は省略)

CO守る会 趣意書

去る昭和三十八年十一月九日の三川鉱大爆発は、四百五十八名の尊い生命を奪い、八百余名のCO中毒患者をだすに至りました。この大災害は、いうまでもなく体制的合理化のもつ社会的・政治的罪業で、まさにCO中毒患者はその〝生き証人〟であります。

総評・炭労は責任者の政府と三井鉱山に対して

一、三井資本の責任追及
二、遺族に対する生活補償
三、CO患者を首切るな
四、前收補償せよ
五、完全治療の実施

を要求、遂にCO特別立法を制定させることができました。しかし、すべてはこんどの闘いに持ちこされたのです。治っていない患者を、危険な坑内に就労させることはできません。あくまで右のことを政府と三井鉱山に要求し、闘いつづけます。

CO患者の闘いは、症状・かたちこそ違え、全産業に頻発している転業病と同じであり、全国の反合理化闘争の発展を目的としています。そのため、積極的に〝守る会〟に参加されることを訴えます。(要旨)

三池炭鉱労仂組合

重要な発言の要旨

この日の中央委員会は、第四次合理化提案(本紙三面の会社提案参照のこと)という会社の重大な攻撃に直面した中で開催されたところから、闘いの方向をどう決定するかのための討論にしても、さすがにきびしいものだった。次におもな意見を要約して、紹介しよう。

闘いの土台は職場での生命守る闘い

――こんどの会社の合理化提案は、プラスの面はどこにもなく、この上生活が破壊されるという重大な攻撃だ。だから阻止行動だけではなく、転場闘争をこそ強めるべきだ。それをやる、やらぬで、はじめて新労組との違いもハッキリし、それをやってこそ新労組内の先進分子を、前向きにすることもできる。

――私はいまこそ「CO・遺族の要求を認めよ、九・二八災害の責任をとれ」と、会社に迫るべきだと思う。第四次合理化を阻止する闘いは、あくまで転場での生命を守るための抵抗闘争が土台となるべきで、その上に阻止行動を加えるように計画すべきだ。

三川ゆきは棺おけに片脚つっこむ気持

――私たち宮浦の転場の労仂者からすれば、三川鉱に移ることは率直にいって「棺桶に片足をつっこむ」ような気持だ。私たちには、三川にゆくことは死を意味している。断じてこんどの攻撃は阻止しなければならない。そのためには共闘関係にある労組と要求を出し合って共闘を発展させ、また転場でも関係転場が連帯を強め、意志統一して闘ってゆくべきだ。

まだ意識不明の宮島さんもいる

――宮浦の人々が三川にくることは死ぬ思いといったが、いまこそそのような三川の現実と怒りの経験を世に訴えることだ。また、あの大爆発のときの退避にとって、あれほど大きな役割を果たした宮浦鉱を閉鎖させてはならず、その意味からも第四次合理化は阻止しなければならぬ。

監督官庁でさえ問題にしているとき、二度と大量の犠牲者やCO患者を出させてはならぬ。いまも意識不明のまま苦しんでいる宮島さんもいる。「父ちゃんを返せ」といまも遺族は叫びつづけている。私たちは四年前のあの悲惨なできごとを思い起こし、とかく行動をためらう人も暖く抱え、署名行動などで社会に市民に訴え闘ってゆこう。阻止行動だけでは不十分だ。

中心は〝生命を守る〟闘い

坑口移転や坑外分離だけが第四次合理化ではない

四山　野田忠義さん

ねらいは変らない

CO問題でも、第四次合理化でも、会社側のねらいは変らず一貫していると思う。ところがわれわれの方は一月二十一日の協定以来、CO患者がどうなっているかサッパリ知らない状態だ。そして残りは金のことだけを片付ければいい、生協の問題にしろ、ただ金作りさえすればいいのだからという言葉に流れがちである。

ところが会社の方は一貫していて、CO患者を片付けてそのつぎに第四次合理化を出してきた。だから坑口移転や第二会社化だけが第四次合理化ではない。坑外だけ、宮浦だけのことではなく、「いらんものはドンドンまっ殺してゆく」という三池炭鉱全体の合理化なのだ。だから四山にも第四次合理化はある。

その本質が解明されないと、CO闘争が家族と遺族の闘いにおわったように、こんども宮浦、坑外だけの闘いにおわりかねない。CO闘争も第四次合理化反対闘争もともに「生命を守る」闘いであり、ひとつひとつの毎日の転場の闘いをもう一度「生命を守る」闘いであることを再確認し、組みなおさねばならない。

中心をすえよう

CO闘争は生協で金を作り、こんどは第四次合理化で闘うということに流れそうだ。そうなれば一つひとつの合理化反対闘争にふりまわされてしまう。

これを機会にCO闘争をもう一度「患者の実態調査」からやり直し、水俣病の闘いや、新潟水俣病の闘いなどと一緒だということを認識し、あくまでも三池だけの一企業の闘いにならないように発展させなければならない。CO闘争のこのような階級的意義を再確認して中心にすえないと、第四次合理化反対といっても力を結集しえないだろう。

一連の合理化をよく見極めて闘おう

――四山の私たちが、港沖竪坑に移るとき、私たちは座りこんで闘う決意を固めたにもかかわらず組合全体の闘いにまで発展せず、やむなく坑底にさがっていった。

それ以前に一人月四十トン平均だった出炭量は、いまでは百トン。これを、会社は宮浦に押しつけようとしているのだ。(現在宮浦の一人月平均出炭量は六十トン余)

あのとき闘いにならなかったことから、四山にはかなりの敗北感が広がっている。ここで大切なことは、「闘えば展望は開けてくる」とするのでなく、「こう闘えば第四次合理化を必ず阻止できる」との展望をまず見きわめることだ。

私たちは千二百人の首切り反対闘争を、安保と三池の合い言葉で全国の仲間に守られながら闘ったが、あの闘いの前ごろ死者はほとんどなかった。そのあとはどうか。いまに至るも死者はうちつづいている。

攻撃は、何も宮浦だけにかぎったものではなく、それもふくめての攻撃となってくるだろう一連の合理化全体をこそ、問題にすべきだ。そこを目標に力を結集し闘ってゆくべきで、展望はそこから開けるだろう。

以上はほんの要約に過ぎないがこのような討論を積み重ねてゆくにつれ、全中央委員の胸に、組織の内部になお残る幾多の障害を克服して、この闘いをすすめるための決意が固まっていった。

強まる炭鉱国有化闘争

益田市議ほか七人の仲間が三池から参加した〝炭鉱国有化要求中央行動団〟(全国で四百四人、九州から百三人が参加)は、去月二十日行動を起こすに当っての意志統一後、直ちに実際行動に移った。

労仂省や通産省・自治省などに対する国有化にからむもろもろの要求や座り込み、友誼の各単産や各政党、石炭協会などに対しては協力要請など、はげしくかけまわり、こんどこの闘いを強める足場をきずき、同月二十六日陽焼けした元気のよい顔つきで全員帰山した。

また十八日九州でも、〝九州拠点共闘会議〟主催のもとで「炭鉱国有化を要求し、産炭地の教育と地方自治を守り、失業に反対する集会」が福岡で開催されたが、全参加者はこんご力を合わせて闘ってゆくことを誓い合った。